

Izumi KATO

*Curiosity,*

遠山正道×鈴木芳雄 連載「今日もアートのお話をしよう」vol.22 展覧会「加藤泉—寄生するプラモデル」(ワタリウム美術館)

%041 %2023

## 遠山正道×鈴木芳雄 連載「今日もアートの話しよう」 vol.22 展覧会「加藤泉-寄生するプラモデル」 (ワタリウム美術館)

ワールドワイドに活躍するアーティストの新たな展開に、度肝を抜かれる。プラモデルに寄生された(?)  
加藤泉の個展会場で、作家と語る / Photographs by Takashi Mishima

「Soup Stock Tokyo」を立ち上げた、実業家の遠山正道氏と、美術ジャーナリスト・編集者であり、長年雑誌『BRUTUS』で副編集長を務め「フクヘン。」の愛称を持つ鈴木芳雄氏が、アートや旅、本や生活について語る「今日もアートの話しよう」。

22回目は、現在、ワタリウム美術館で開催中の展覧会「加藤泉-寄生するプラモデル」へ。人間なのか人を超えた存在なのか、独特の存在感を放つモチーフを描いた絵や彫刻、フィギュアなどの立体作品で世界的に人気の高い加藤泉氏が、ヴィンテージのプラモデルと彫刻を大胆にコラージュしたシリーズを展示、想像も常識も軽く超えた世界が広がる。加藤さんをゲストに迎えて、彼のプラモデル愛、アーティストへの道程、アートについて思うことなど、さまざまな話をうかがった。



左より、遠山正道氏、加藤泉氏、鈴木芳雄氏。

### プラモデル大人買いから生まれた新シリーズ

**鈴木：**今日は加藤泉さんの不思議なタイトルの個展会場でお話を聞いていきます。

**加藤：**よろしくお願ひします。

**遠山：**新型コロナウイルスのパンデミックで、外出規制とか展覧会がキャンセルになった、その間にプラモデルをつくるのが楽しくて始めたとか？

**加藤：**はい、ヴィンテージのプラモデルをネットショッピングで大人買いして（笑）。

**遠山：**もともとプラモデルが好きだったのですか？

**加藤：**そうです。動物シリーズのプラモデルを発見して、これはつくってみようと思って買い始めたんです。箱も素敵で。たまたま鳥のシリーズをつくったときに、つくりかけの自分の木彫作品にのせたり付けたりしたらいけるんじゃないかと思ってやってみた。これはいける、展開できそうだと思ったのが始まりです。

**鈴木：**ここ2階の会場には、ジオラマのシリーズが並んでますね。川とか雪とか、どうやって作るんですか？

**加藤：**これは四角い木から切り出して、ノミやチェーンソーを使って彫刻して、着彩しています。手仕事が好きなんですよね。プラモデルも僕、つなぎ目が好きで。普通はつなぎ目を消すんですけど、僕は美しいと思って強調しています。溶接の跡みたいにしたいんですね。

**遠山：**こういう有機的なものにプラモデルの硬質なものが合体して、やばいね。魅力的です。

**鈴木：**人体模型のスケルトン。これ、本当は内臓ごとに色をつけたりしてつくるのかな？



手前の作品：《無題》2022年。9点組のジオラマシリーズのうちの1点。

**加藤：**そういうこともできます。僕は目のところ以外、色をつけてないんですけど。プラモデルの素材も、昔は硬いプラスチックだったのが今はつくりやすく柔らかいのに変わってきてます。でもこの昔のは、つくりが悪くて、内臓がなかなか入らない（笑）。

**遠山：**この大きい写真の作品もプラモデルですか？

**加藤：**これは彫刻です。フランスのノルマンディー地方の、ル・アーヴル市から依頼されて設置した作品です。この写真がほぼ実物大で、高さ7メートルあります。1メートルくらいのサイズの木彫を僕がつくって、それを現地に送って、向こうの工場で大版をブロンズで制作しました。

**鈴木：**さわれるんですか？

**加藤：**さわれますよ。夜になると下からライトアップされてけっこう怖いですが（笑）。この作品、教会の前に設置されているんですけど、問題になったというか、設置反対、撤去しろという住民がいたので住民投票になり、結局大丈夫になったんですけど。その反対した人たちの理由が、人間と蜂が交尾している、教会への冒涇だ、子どもが悪夢を見るようになった、とか。その発想すごいなって（笑）。

**遠山：**以前、渋谷のホテルのロビーに加藤さんの作品の設置を提案したことがあるんだけど、採用されませんでした（笑）。

**加藤：**そうなんですか？ 残念。

**鈴木：**そういう反響があるほうがいいんだよね。当たり障りないものじゃつまらない。



フランス、ノルマンディー地方のル・アーヴル市に設置された高さ7メートルのブロンズ彫刻作品《無題》2022年。

## とうとう、オリジナルのプラモデルをつくっちゃった

**鈴木：**4階のほうの会場には加藤さんの作品と並べて、プラモデルの箱が展示されてますね。すごい数。少年時代はどのタイプが一番だったんですか？ 飛行機、それも戦闘機とか？

**加藤：**いや、世代的にはガンプラなんです。でもガンダムにはあまりハマらなくて、結局車とか飛行機、戦車とか普通のやつをつくって、それを爆竹で爆破してた（笑）。

**遠山：**爆破!? すごい。

**加藤：**ちょうど小学校6年生くらいの頃に最初のガンダムのプラモデルを買いました。あとその時期に、横山宏さんという人のつくったプラモデル、「S.F. 3.D ORIGINAL」というシリーズが一番好きでした。今は「マシーネンクリーガー」として再販されてる。それ今でもちょっと買ってつくってますね。



**鈴木：**遠山さんはプラモデルは？

**遠山：**いや、まあ通ったことはあるけど。でも加藤さんの世代はプラモデルっていう感じじゃないんじゃないの？

**加藤：**いや、全然プラモデルでしたよ。田舎だったからかもしれないけど。ファミコンもテレビゲームもまだあまりなかったから、だいたい男の子が家でやる遊びはプラモデルかマンガ。

**遠山：**これ、頭はソフビなんですか？

**加藤：**そうです。これは型から手で抜ける最大のサイズ。一時期、ソフビの作品をたくさんつくったんですけど、最近では僕の中ではソフビのブームが終わってあんまりつくってないです。こうやってバラバラにして、素材の一つとして木彫とプラモデルとかに組み合わせて使ってますね。

**遠山：**生き物のプラモデルばかりなんですね。植物の解剖図まである。

**加藤：**生き物と飛行機ぐらいですね、作品に使っているのは。車とか他にもいろいろ持ってはいますけど。

**鈴木：**これが、オリジナルのプラモデルですか？

**加藤：**そう、最終的に僕、自分のプラモデルをつくったんですよ。エディション200で、自分の作品として。まだ販売していないんですけど。1/1スケールで、石の作品です。立体にこのシールを貼るの、なかなか難しいですけどね。この見本はプロの人が貼ってくれたんで。

**遠山：**こんな言い方してアレですけど、せっかくプラモデルなのに石って……。

**加藤：**そうですね（笑）。要は自費出版というか、自費制作です。音楽のレコードを出しているレーベルから、プラモデルも。

このプラモデルは、元の通りにつくってもらってもいいし、自分の好きにつくってもらってもいいんです。デカールも色のついたのとモノクロームのと2種類付けて、好きなほうを貼り付けてもらって。これが設計図。箱も貼り箱で特注です。

**遠山：**いやー、自分のプラモデルをつくって出すって、子どもの夢じゃない？ でも石ってね……。

**鈴木：**笑。200個のロットだと、金型とか高そうだし、単価はけっこう高額になるのでは？

**加藤：**はい。作品の値段です。それでもシリーズで3つくらい出さないと赤字かな。

**遠山：**この、オリジナルプラモデルの元になった作品は、石巻の「Reborn-Art Festival 2021-22 後期」で展示されていた石の作品ですか？

加藤：そうです。石巻から持ってきて、この展覧会会場のある建物の通りを挟んだ向かいの空き地に展示しています。

鈴木：既存の石にペイントした、涅槃仏みたいに横たわってる作品ですよね。あれを発表したのもすごいね。東京都庭園美術館のグループ展「生命の庭—8人の現代作家が見つけた小宇宙」（2020年）でも他の作品を展示されていたのを見ましたけど、既存の石を使っているのに、どうしても加藤さんの作品になっちゃうのがね。



ワタリウム美術館と通りを挟んで向かい側の空き地に展示された石の作品《無題》2022年。宮城県石巻市で開催された「Reborn-Art Festival 2021-22 後期」に出品。石巻市稲井地区で採掘された稲井石を見立てて、津波被害の大きかった南浜地区の、流されずに残った蔵の前に展示した。Photo/ Yusuke Sato Courtesy of the artist ©2022 Izumi Kato

## 絵と彫刻、彫刻と絵—スランプからの脱出

鈴木：初めて立体を手がけたのは、絵を描き始めてから何年くらい経ったときですか？ もともとは絵が先ですよ  
ね。

加藤：絵が先です。2005年くらいかな、スランプになって描けなくなっちゃったんですよ。そこから脱出するために、まず木彫をつくってみようと。それが続いていますね。

遠山：スランプというのは？ 絵が売れなくなったということですか？

加藤：いや、売れる売れないは関係なくて。絵って本当に、行き詰まるんです。うまくいかない。みんなそういう苦しい時期がある。僕も典型的に、35歳くらいのかかな、もうまったく変なものしかできなくて、自分でもうだめだって精神的に追い詰められる。それで彫刻とかやってみたらスランプ抜けられるんじゃないのと思ってつくってみたら、本当に抜けられた。そこからはもう、スランプらしきものはないです。

鈴木：以後、スランプはないんだ。

加藤：ないですね。スランプのときってこう、トンネルの中を走ってるみたい。出口がない、真っ暗なトンネル。でもそのときは何か、そういうものだと思っていた。まわりにそういう大人も何人かいて、要するに下手ってことなんだろうと。でも彫刻をやってみたら、ある日、パーンって飛んで抜け出たみたいになったんですよ。答えが見つかったわけじゃないのに。そこからは閉じ込められているような感じもなくなって、無限の空間というか、やっちゃいけないことはもうない、こうしなきゃいけないと言われることもない。好き放題にやれるようになった。

遠山：それは自分で描くこともそうだけど、外からの評価とか、そういうことも影響してたんですか？

加藤：どうですかね。基本的に大きかったのは、作品で食えるようになったことです。バイトしなくてよくなった。僕、本当に仕事が好きじゃなくて、モチベーションが落ちてしまって、そこが一番のネックだったんです。それがなくなった。朝起きて、今日も作品をつくるだけでいい。ありがとうって思っ起きて起きる。そんな感じです。今でも。人から褒められるとか、そういうのはあんまり信用していない。人って手のひらを返すのでね。とにかく、アーティストとして生活に困らないというのが一番大きいです。

遠山：じゃあ、今はもう、最高ですね。好きなことをやって、買ってくれる人がいて。

加藤：そうですね。

鈴木：絵の作品もいろいろな形態がありますね。実験的というか。

加藤：このペインティングは、デッドストックの、違う色のキャンバスを使っています。2つのキャンバスを繋ぎ合わせた状態で描いています。そうでないと絵にならない。別々に描いて組み合わせても成立しないんですよ。いろんなところが関係しているんです、実は。

鈴木：別にアトリエが狭いからちょっとずつしか描けないわけじゃない？

加藤：ええ、まあ狭いですけど、そういうわけじゃないです。この赤いのは、キャンバスメーカーが試しにつくって発売しなかった、そういう希少種ですね。しかも赤はキャンバスの裏側なんです。そういう変な画材があると、知り合いの画材屋さんが連絡をくれる。加藤さんが好きそうなのが入りましたって。このシリーズは、緑と赤と黒と、買いましたね、多分もう手に入らないです。そういうのよく来ます、古くて黄色くなった紙とかキャンバスとか、加藤さん使いますか？ じゃそれ買いますって。

鈴木：おもしろい。





《無題》2021年。2種類のキャンバスを用いた油彩の作品。



《ITC》2020年。布にアクリル絵の具で描き、リトグラフとソフトビニール、刺繍などをコラージュした作品。「もし自分の作品がプラモデルになったら、どんな箱をつくりたいか」を想像しながらつくった。タイトルのITCは実在したプラモデルのメーカー名。

## 島根の自然児が東京でアーティストになるまで

鈴木：少年時代の話を知りたいです。島根県出身ですよね。海の近くで、天気の良い日は釣りをしていたとか。

加藤：はい。祖父は漁師でした。

鈴木：雨の多い地域ですよね。それと出雲大社があって、神様が集まる場所。

遠山：水木しげるも島根県でしたっけ？

加藤：水木しげるは鳥取県の境港なんですけど、僕の地元は島根県の安来市といって、ちょうど県境で近いです。はい、雨が多いんですよ。

鈴木：神々や妖怪が近くに住まうところ。そういうところから加藤さんという作家が出てきたのはわりと頷ける、と思っているんですけど。



《無題》2021年。プラモデルの組立説明書に描かれている絵を自身の絵とコラージュし、ヴィンテージの布などを使って掛軸に仕立てた。

遠山：武蔵野美術大学出身ですよね。高校時代からアーティストになろうと思っていたんですか？

加藤：いや全然。高校時代はサッカーばかりやっていて勉強しなかったんです。東京の大学に行きたかっただけで（笑）。美術は特別に好きでもなくて、美術部に入ったこともない。東京藝大も受験してないです、どうせ落ちると思って。珍しいと思うんですけどね、藝大を受験してないアーティスト。

遠山：でも武蔵美の油絵学科に入った。

加藤：はい。

遠山：で、入ったら意外にそこで目覚めてしまって。

加藤：いや目覚めなくてね（笑）。ちょうどバンドブームで、ずっとバンドやっていたんですね、テレビのイカ天とかに知り合いがいっぱい出て。僕カッコつけて出なかったんですけど。僕と入れ替わりでスピッツのメンバーが卒業したくらいの時期です。絵なんか描くのはダサい、みたいな感じで美大生がみんなバンド組んでた。あと、大竹伸朗さんがちょうどブレイクして、みんな大竹さんが好きで、カッコいい、大竹さんも音楽やってるって真似してた。

鈴木：そうか、1987年に佐賀町エキジビット・スペースで大竹さんの個展が開催されて、そのあと、西武美術館でもやって、彼の第一期全盛期だ。

加藤：はい、僕は1988年に入学したので。西武美術館ではアンゼラム・キーファーとかフランチェスコ・クレメンテとか、いろいろな展覧会を観ました。勢いがありましたね。

遠山：卒業して就職したんですか？

加藤：いや、就職せずにアルバイトしてました。まだバブルがちょっと残ってて、遊園地とかテーマパークのつくり物、造形屋さんのバイトが結構よくて、みんなやってた。



遠山：アーティストとして自覚したのはそれから？

加藤：30歳くらいですね。仕事が嫌いだったので。社会的にも追い込まれる年齢で、それまでそんなに美術は好きじゃないと思ってたのが、あるとき思いのほか好きだって気がついた。これは美術で勝負するしかないとバイトを減らして、制作の時間をつくるようになった。展覧会は増えてきたけど貧乏で、飲みにも行けない、音楽どころじゃない。これは作品を売るしかないと追い込まれたときにちょうどSCAI THE BATHHOUSEから個展の話が来たんです。

それまでは貸画廊で、作品が売れても生活費は1ヵ月しか持たない、残りはバイトするしかなかった。こんな何十年もやれないと思って、作品を売るには商業ギャラリーでやるしかないなど。ちょうど小山登美夫ギャラリーとか若いギャラリストが台頭してきて、友達が何人か所属して売れるようになって、羨ましいなと思ってました。奈良美智さんや村上隆さんが売れ始めたのもあった。

鈴木：でもその頃、小山登美夫ギャラリーで展示してた若手の作品、みんな安かったよね。

加藤：当時まだそんなに食えてる人いなかった。大竹さんがあれだけ有名なのに食えないらしいよって。そんな時代です。

だけど、せっかくSCAIで、初めての商業ギャラリーでの個展の時期に、例のスランプだったんですよ。絵が描けないから、すみません、と彫刻展にして、数もまだあまりつくれてない、ガラガラな感じでオープンしたんです。

鈴木：え、そうなの。でもいい展示だったと評判だったよ。『AERA』とかにも出て。



参考画像（本展には出品されていません）。2005年村上隆キュレーション「リトルボーイ：爆発する日本のサブカルチャー・アート」（ジャパン・ソサエティ・ギャラリー、ニューヨーク）での展示風景。Courtesy of Japan Society © Izumi Kato 左端がSCAI初個展に出品した初めての大型木彫作品《無題》2004年（高橋龍太郎コレクション蔵）。

## 「リトルボーイ」とヴェネチア・ビエンナーレが転機に

遠山：じゃあ、今、アートバブルみたいな感じだけど当時と全然環境が違いますか？

加藤：違いますね。SCAIの個展も全部売れたけど、それで生活費は1年間は持たないな、3ヵ月くらいかな、という感じでした。

遠山：そうか、そこからまだ十数年なんですね。

加藤：僕、スタートで出遅れてるんで、37歳くらいでしたから。

鈴木：ヴェネチア・ビエンナーレに出品したのはいつでしたか？ 展示観ましたよ。

加藤：2007年です。

遠山：そのときにはもう結構評価されてたんですか？

加藤：いや、まだ多分そうでもなかったですよ。水戸芸術館現代美術ギャラリーで「クリテリウム」という若手の個展（2001年）と、グループ展「孤独な惑星-lonely planet」（2004年、窪田研ニキュレーション）に出たくらい。

鈴木：ヴェネチア・ビエンナーレはMoMAのキュレーターとかをやったアメリカ人初の芸術監督、ロバート・ストーのキュレーション展「Think with the Senses-Feel with the Mind. Art in the Present Tense」に呼ばれたんですよ。彼は加藤さんを何で知ったのかな。

**加藤**：2005年にニューヨークのジャパン・ソサエティー・ギャラリーで村上隆さんキュレーションの「リトルボーイ」展に参加したのが大きいと思います。その後すぐ、アーモリー・ショー（ニューヨークのアートフェア）にもSCAIから出品していたので、そこで見てくれたようですね。

**遠山**：ずっと日本で活動してたんですか？

**加藤**：ええ、留学もしていないし、レジデンスとか奨学金、文化庁の派遣なんかもいっぱい受けたけどダメだった。賞も取れなかったですし。

**遠山**：じゃあ、その「リトルボーイ」が本当に転機だったんですね。

**加藤**：そうですね。でもそこから一気に売れるようになったわけではなくて、やっぱり大きかったのはヴェネチア・ビエンナーレです。海外の人が作品を買ってくれるようになって、その後から食えるようになった。

**遠山**：作風はその前からずっと変わっていないんですか？

**加藤**：まあ変わらずというかね、変わってるんですけど、基本は変わっていないのかな。

**遠山**：今や作品も売れるし、バンドもやれるし。

**加藤**：まあ、たまたまこうなったけど、でも明日には売れなくなるかもしれないし。僕らの仕事は保険なんか掛かってないんで、今の時代、いつ落ちるかわからない。好きなときにやっておかないと。

**遠山**：え、そういう恐怖があるんですか？

**加藤**：恐怖はないんですけど、そういう世界なんだとわかっている、ということです。なんでかという、若い頃から今までずっとこう、篩（ふるい）にかけている感覚がある。同世代のアーティストもどんどん消えていくからね、あと学校の先生になったりとか、あんまり残らないので。今、外国でやっても僕ぐらいの世代の人とか、10歳くらい下の世代っていうのは、ふるわれてる感じが強いんです。巨匠でもないし若造でもないし、今は生活はできてるけど、まだまだふるわれてる感じががあるので、全然安泰じゃない。

ここでよくない作品出したら落ちるって状況が、普通にあります。その感覚はおそらく、あると思いますよ、職業としてアーティストやってる人はみんな。すごくはっきり、あります。

**遠山**：そうなんですかね。変に売れすぎちゃってブレる人とか、いるのかな。

**加藤**：はい、いっぱいいますね。そういう世界なんで、本当に、お金があるうちに使ったほうがいいなと思うんです。貯めるのは楽しくない。楽しみたい、楽しいことに使いたい。好きなことにぶち込みたい。だから、ヴィンテージのプラモデルとか、こういうバカバカしいものに突っ込んでみたいんです。



### いい絵を描きたい、それが最終目標です

**鈴木**：アジアとヨーロッパだと、どちらも人気だと思いますが、売れるのはどちらなんですか？

**加藤**：売れてるのはアジアです。経済が強いんで。

**鈴木**：モチーフの解釈とかは、ヨーロッパの人が見るのと、アジアの人が見るのとでは違うんじゃないですか？

**加藤**：全然違いますね。まあ、いろんなふうに見られるようにつくってるので、それは問題ないです。

**遠山**：自分でコンテクストをあまり語らないんですか？

**加藤**：コンテクストというか、作品の説明は基本的にしません。でも、僕はどういうつもりでつくってるとか、何がいいと思ってる、とかは、ちゃんと伝えるようにしています。

**遠山**：あの、胎児のような人物というか、ずっとあれに収斂していつてるのはどういうことなのかな？

加藤：基本的に、いい絵が描きたいんです。最終的な目標というか。そのために、人間をモチーフに入れたほうが、今のところいい絵が描けるんです。彫刻だとそれがさらに勝手に発展していったら、なのでやめる必要が今のところない、という感じですね。やりたいというよりは、やめる必要がない。

遠山：ほっとくとああいう顔になっちゃってるんですか？

加藤：うーん、なんていうか、誰かを描いてるわけじゃなくて、画面とやりとりするなかで、いい感じになっていくと、ああいう顔になる。でも全部一緒じゃないんですよ、そのときごとにちょっと違う。そのときのやりとりで、今こういうプロポジションがよい、というのを描いています。

鈴木：立体でも、3人とか、家族みたいな構成にしている作品がありますよね。

加藤：家族形態にしてるほうが、観た人がいろんなふうにと考えると、観る人にいろんなことを考えてほしいので、そのために必要と思ったら、3人家族だったり、何人か増やしたりしてつくると思います。

鈴木：日本ではギャラリーに所属していないんですね。

加藤：はい、マネジャーがいて、制作や、美術館の展示会の仕事とかは、自分のスタジオでやっています。海外のギャラリーはパリ、香港、ニューヨーク、東京、ソウル、上海に出店しているペロタンとロンドンのスティーン・フリードマン・ギャラリー。

こちらから営業するわけじゃないし、選ぶというよりは選んでもらった。アーティストとギャラリーの関係は、ビジネスだけでもダメだし、難しいですけど、今のところその2つのギャラリーとはうまくいっている。海外で仕事しやすいので、ラクですね。今はアジア全体で一つのマーケットになっているので。

鈴木：日本で加藤さんの作品が欲しいと思ったら東京のペロタンに聞けばいいですか？

加藤：そうですね。

鈴木：島根県出身の人では錦織圭の次に有名人だって聞きますよ。

加藤：え、それ島根から東京に出てきた人の間でしょ。島根じゃ誰も知らないですよ。美術館からも声かからないし。

遠山：いやもう弾けてて、最高だな。やりたい放題な感じが伝わってきます。何か加藤さんの有機的なのと、プラモデルの硬質な感じが合体してるのが造形として気持ちいい。2階のゾーンが好きですね。木彫の上に1個の風景みたいに展開しているジオラマのシリーズとか。私、特に鱒のプラモデルが川にいる作品が気に入りました。

鈴木：とにかく、なんでも加藤さんの世界になっちゃうじゃないですか。絵はもちろんそうだけど、石もそうだし、プラモデルさえも取り込んで、この強引さみたいなのがすごいな、と改めて思いました。



手前、奥ともに《無題》2022年。ジオラマシリーズ9点組。



## Information

加藤泉—寄生するプラモデル  
IZUMI KATO—Parasitic Plastic Models

会期: 2022年11月6日(日)~2023年3月12日(日)  
Term: November 6 (Sun.) – March 12 (Sun.) 2023

会場: ワタリウム美術館  
Venue: WATARI-UM, The Watari Museum of Contemporary Art